

時評



弁護士
大森典子

1 今「黒川の女たち」という映画が話題を呼んでいる。

戦争末期の昭和18年(1943年)3月、疲弊していた岐阜県の黒川村から、田畑を売って後顧の憂いをなくし、黒川村の約半数の農家が満州の地に移住した。移住した先は、満州のほぼ中央部の陶頼昭。そこでは新たに田畑を開拓するのではなく、中国人の開拓した美しい畑を奪い、家も奪って「開拓団」としての生活を始めたのである。当時関東軍は、こうして内地から移住した農家を国防の第1線に位置づけていたが、開拓団はそんなことは知る由もなく、2年余りが過ぎた昭和20年(1945年)、若い男たちは満州の地から兵隊にとられ、女子供が残される、という状況で、8月9日、ソ連軍が北から満州に攻め込んだ。間もなく終戦となるが、すぐに起こったことはソ連軍兵士による暴虐の他、もともと現地に住んでいた中国人による畑と家の奪還をめざす攻撃であった。

このために、敗戦後日本の元の村に帰ろうにも帰れず、集団自決した開拓団も続出する中で、黒川村の開拓団は、こうした「匪賊」の襲撃から開拓団を守るためにソ連軍に警護を依頼する。そしてそのための見返りとして

“歴史の真実を知る”とは

15人の未婚の女性をソ連軍に差し出したのである。

黒川開拓団は、こうして苦難の末約600人の移住者のうち約400人が帰国を果たし、新たにもとの村近くの土地を開墾して、戦後の困難な時期の再スタートを切った。しかし15人の女性たちは、開拓団から感謝されるわけでもなく、むしろ白い目で見られる、というさらなる苦難に遭遇する。

開拓団の人々からすると、白眼視したのではなく、心の中では手を合わせていても「そっとしておいた方がいい」という認識だったかもしれない。しかし冷厳な事実、開拓団の話とともにこの事実は歴史の中にうずもれて忘れ去られるところであった。この沈黙を破ったのは、15人の女性たちの中の2人、佐藤ハルエさんと安江善子さんが、長野県阿智村の満蒙開拓平和記念館で2013年に事実を証言してからであるという。

今回の映画もこの流れの中でようやく日の目を見ることになった、といっていよい。

2 この映画を見て、最初にしたことは、あの戦争の中でどのようなことがあったのか、私たちは本当に知らされていない、ということであった。

学校であの満州国は、日本の傀儡政権で、日本の侵略の象徴的な出来事としては教わるものの、そこに「開拓団」として定住した人々の、日本における暮らしがどのようなであったのか、また「分村」して開拓団を出した村の人々の生活や戦後の様々な葛藤については知らされていない。

しかし近年劇作家として活躍

している胡桃沢伸さんは、祖父がこうして開拓団を送り出し、結果としてその開拓団は集団自決を余儀なくされた村の村長であったので、責任を感じて1946年に自殺したという。(朝日新聞8月16日)

3 長野県阿智村には「満蒙開拓平和祈念館」が立てられ、満蒙開拓の実相を知ろうとする人々の願いにこたえてくれている。しかし一言で「満蒙開拓」と言ってもその開拓団を出した村の実状や、満州に移り住んだ人々の暮らしや、戦後の引き上げの実際の姿はなかなか知る機会がない。しかしこれらの人々の暮らしや苦難は間違いなく、私たちが歴史の教訓としてその詳細を知るべき事実である。

そしてこの「黒川の女たち」の映画は、さらにこれらの人々の苦難の歴史にくわえて、女性たちがどのような犠牲を払ったか、についても考えさせてくれる。最初にこの平和祈念館で、女性たちの苦難の歴史を語った佐藤ハルエさんは初めから、この歴史は、きちんと後世に伝えなければ、と考えて語ってきたという。

あの戦争の加害と被害の歴史はまだまだ十分に知られていない。ところが、最近ではあの戦争の実相を次の世代に教えようとし、ない勢力が台頭し、本当の反省がないままに戦前のような思想や行動が平然と目の前で行われているのではないか、という恐怖と嫌悪を感じることもある。

繰り返し歴史に学び、次の世代に引き継いでいかなければと思うこの頃である。

(おおもり のりこ)